



# 「青物神輿」と「ばんばら」

## ——湖北町速水・伊豆神社の八朔祭——

速水は湖北町のほぼ中央にあり、町役場所在地です。北国街道に沿って発展した集落で、すぐ東側に国道8号線が並行して南北に走っています。この両道に挟まれて伊豆神社が鎮座します。創祀年代は不詳ですが、古くは伊豆権現と称し、明治初年現社名に改めたといわれています。祭神は瓊々杵尊・八重事代主命・波多八代宿禰波美臣命で、氏子は約270戸です。

この伊豆神社で毎年9月1日八朔祭が行われます。八朔は8月朔日のことで、昔は旧暦8月1日でした。秋の収穫を前にして豊作を祈る農耕儀礼です。県内にもいくつかの例がみられますが、行事の内容からみて伊豆神社の八朔祭が代表的な八朔行事であるといえます。

伊豆神社の八朔祭の特徴的行事は奉納相撲のほか「青物神輿」と「ばんばら」行列を行うことです。

「青物神輿」は、氏子が五穀豊穡を祈願して、郷内より収穫した五穀・野菜・果物・草花その他の青物約80種類を使って飾りつけた「造り神輿」です。この神輿がいつからつく

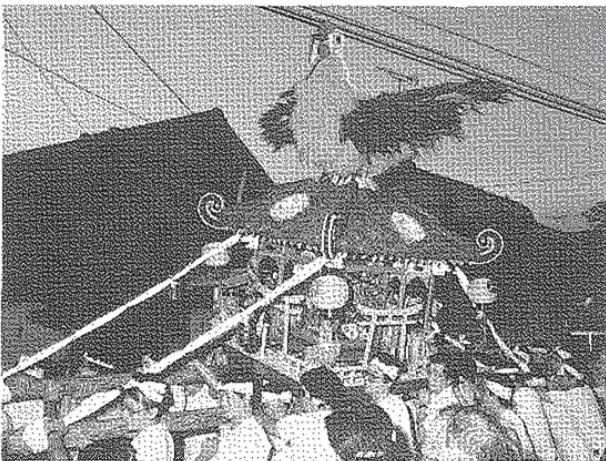
られたものかは分かりませんが、もと氏子が各家ごとに自作の五穀・菜果などを神饌として神前に供えていたものが、次第に神饌を盛った台盤を奉昇して供えるようになり、江戸時代に入り神輿の骨組みを木で造り、青物で飾りつける現在の形になったと伝えています。因みに現在の神輿の骨組みは、明治41(1908)年に寄進されたものです。第2次大戦により5年に1回程度となり、昭和51(1976)年から途絶えていましたが、ことし復活されました。神輿の製作は青年団が行っていましたが、ことしは幡母衣・青物神輿保存会(会員数140)が当りました。作り方の記録はなく、すべて秘伝・口伝です。作業場所は前回区の集会所でしたが、今回は「陳の森会館」で行われました。製作の日程はおよそ次のようです。

### (1)「神輿洗い」8月24日

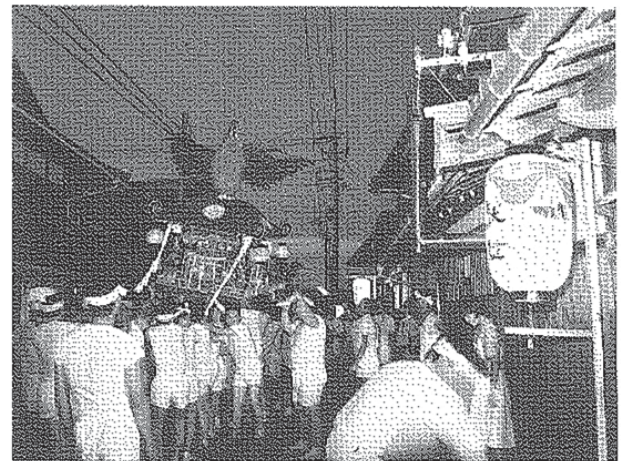
「屋台」と呼ばれる木製の神輿の骨組みを村の「御手洗」という小さい湧水池で洗い清めます。

### (2)「紙貼り」8月25日

和紙の色紙(紺・赤を主に、部分的に金・



「青物御輿」



「青物御輿」の渡御

銀を使う)を屋台に貼りつけます。

(3)「飾りつけ」8月26日から

神輿を構成する部分を①鳳凰②屋根・巴・たるき③面(正面・裏面・左面・右面)④柱(上り龍・下り龍・牛若丸・弁慶の4本)⑤袖板・赤柱⑥顔に分け、それぞれ2~5人程度が1組となって担当します。

作り物は野菜の形や色を生かし、着色や人工的な加工をほとんど加えず、材料の持味を出します。主な作り物はすべて「猿の腰掛」(サルノコシカケ科の担子菌類の総称、木の幹に半円形の腰掛状に生じる)の上に作ります。日頃からできるだけ大きく形の良いものを集めておきます。材料としては、里芋(ずいき)200本、南瓜(はやど・菊水)20本、へちま、鶏頭(久留米、チーム)、すすき、バラシ200枚、ひおうぎ、胡瓜、シャガの根10ヶ、ダマ・ピワの葉・フングリ、オクラ(青・紅)、太レイシ、千瓢、とうもろこし、土生姜、てこいも、オモチヤカぼちゃ、ほうきトウキビなどです。準備が長くかかるので、祭当日の朝、萎びた野菜はつけなおします。したがって材料は2倍用意しなければなりません。

屋上の鳳凰は南瓜・芒・鶏頭花・葉蘭・ひおうぎなどで造り、たるきは里芋のずいき、ますがたは高野豆腐、かえるまたは生姜、鳥居・勾欄は干し飯または胡麻、扉のかまちは寒天、これに大豆・小豆・麩などをちりばめます。

神輿の四方の扉を面といい、神輿の出来栄えを左右する重要な部分です。各面ごとに童話・物語・歴史的な事件などからテーマを選び、趣向をこらします。ことしは、正面が「浦島太郎」、裏面が「石童丸」、左面が「花咲爺さん」、右面が「桃太郎」でした。たとえば、正面の「浦島太郎」は、海亀に乗った浦島太郎が龍宮城に向う場面でしたが、どのような野菜を用いて飾りつけるかをみてみま

しょう。浦島太郎は、針金を芯に臘で肉づけし、頭髮は毛糸で、ほうずきの烏帽子、胴は巻鮓用海苔で作った子袖、その上に巻昆布の袖無しを羽織り、千瓢の帯、腰はとうもろこしの褌、その上にバランの腰巻き、瓢箪のドンベを下げます。海亀は、胴を支那南瓜、頭を松傘、尾を茗荷、目はほうずきの種。乙姫は、顔と腕を蠟、胴はとうもろこし、背子(からぎぬ)をケイトウの花、衣はとうもろこしの皮、裳(も)はもくずのり、手にもつ領巾(じれ)は千瓢、というように作るのです。

(4)「ろうたき」8月28日

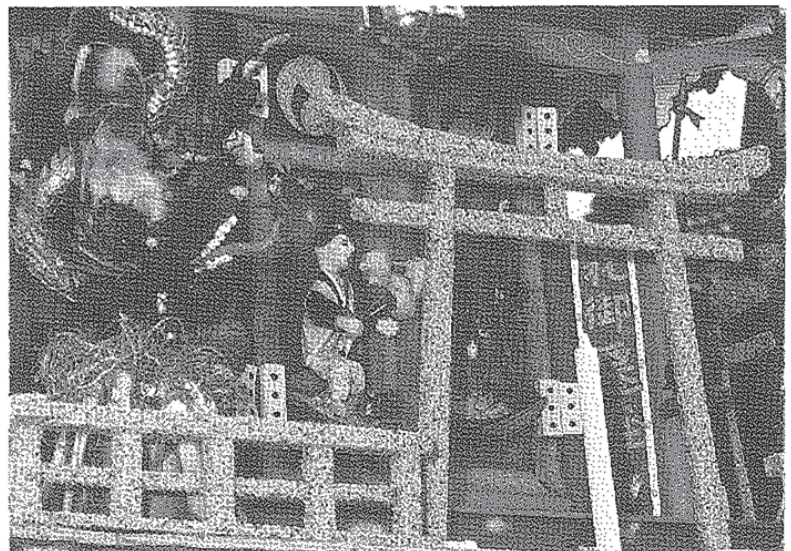
人形の顔や動物を作るのに用いられる蠟作りは長年の秘伝で、代々の神輿作りの中からただ1人口伝されています。

(5)「屋根覆き」8月29日

(6)「青物神輿の組み立て」9月1日

朝6時、それぞれに製作した「鳥(鳳凰)」「本体」「屋根」「面」を外に出し組み立てます。出来上がった「青物神輿」の高さは284cm、重さは300~400kgに達します。屋根の上の鳳凰は、胴から尾まで200cm、胴からとさかまで120cm、羽端から羽端までの長さ200cmという大きさです。

神輿は、午前10時30分役員により神社へ移動。午後1時30分神輿に神移しの儀が行われます。区の北方「御池」で水垢離をとった青



「青物御輿」の正面細部(浦島太郎が見える)

年8人が神輿を御旅所へ移します。午後6時  
青竹を吹いて「じぶんぶれ<sup>時分 触れ</sup>」。御旅所の儀のあ  
と、少年のもつ高張り・弓張り提灯を前後に  
囲まれ、町内北国街道を南下し神社前を通り、  
速水の南端で折り返す行程を2時間余り練り  
昇いで神社へ還御するのです。

神輿が神社へ還御されますと、それを合図  
に御旅所から「ばんばら」の行列が出発しま  
す。

「ばんばら」の呼称は、武者の背負う母衣<sup>はもろ</sup>  
とこれに掲げる幡<sup>はた</sup>から「幡母衣<sup>はたはもろ</sup>」と言ったも  
のが転訛したと考えられています。つまり「  
ばんばら」というのは母衣武者行列のことで  
す。母衣は平安末から室町時代に武士が鎧の  
背につけた飾りで、内部に籠を入れた袋状の  
布をつけ、流れ矢を防ぐ役目もあったといわ  
れています。速水の『母衣武者行列由緒記』  
によれば、仲哀天皇のとき、熊襲親征に供奉  
した当郷の72家の土豪の様を写したものと  
してありますが、疑問な点が多いのです。また、  
武者の背に指す「伊豆大神」の幟の先につけ  
る瓢箪も、いつの頃からか加えられたものら

しく、時代とともに母衣武者の姿も変化して  
きたものでしょう。「ばんばら」は「青物神  
輿」とともに一体となって渡御が行われてい  
ましたが、昭和11（1936）年の祭礼を最後に  
途絶えていました。それがことし52年ぶりに  
復活されたのです。

「ばんばら」も「青物神輿」と同じく速水  
の町内北国街道を練りまわり、最後に伊豆神  
社へ奉納します。行列の構成順序は次のよう  
です。

#### (1) 作り物

道路幅（約4m）の大ききで、人を除ける  
ための大型の作り物で、たとえば福助や大天  
狗などがあります。各小字に依頼して作り、  
台車に載せて引きます。

#### (2) 露払い

紋付羽織袴着用の男子（現在は42才の厄年  
）数名。約4尺の青竹を杖にします。

#### (3) 大榎

紋付羽織袴の男子1名。露払いの中から1  
人を選びます。

#### (4) 金御幣



「ばんばら」の母衣武者



「ばんばら」母衣武者の後姿



「ばんばら」行列

紋付羽織袴の8～10才の男子1名。

(5)金棒引き

8～12才の男子。産衣うぶぎに鉢巻、襷をかけ、巴の紋入りの前掛をし、4尺位の金棒を引きます。

(6)指揮者

祭りをよく知る男子2名が当ります。陣笠に紋付羽織袴着用。拍子木にて行列を指揮します。

(7)母衣武者

20才位までの氏子若衆数名（奇数、ことしは7名）。該当者の多い場合は神前で籤くじによります。鎧を着、顔に化粧し、鬘をつけ、後鉢巻をし、革足袋に晒引裂紐の二重草履を履きます。木太刀を帯び右手に日の丸の鉄扇を持ち、そして背に母衣を負います。母衣は長さ3m位、周り25cm位の竹を末より3分の2位を24本に割り、その根元中央ねもとを籠かごにおさめます。24本に割った竹にはそれぞれ2個の紅提灯と造花を吊し、短冊もつけます。すべて1基の母衣に48個の紅灯を点じます。母衣の中央に「伊豆大神」と染めた幟を立て、銀紙を張りつけた瓢箪を旗印として幟竿の先端に取りつけます。また、籠かごに交叉した抜刀を装置します。

指揮者の拍子木によって起立・前進・休息をくりかえしつつ、右足より左右へ半輪を描



「ばんばら」行列の作り物、福助

きながら舞う姿はまことに美しいものです。

(8)床几とこざね持ち

7、8才の男子。母衣武者の数と同じ。長襦袢、白脚絆、後鉢巻、草履、伊豆神社の紋の前掛の姿で、母衣武者休息用の床几とこざねを持ちます。しかし、子供には重いので別の小さくて軽いものを持たせ、その床几とこざねをもって母衣武者のお練に合わせて舞うのです。実際に使用する床几とこざねは、次の付き人の外に床几とこざね持ち1人が従います。

(9)付き人（武者付添人）

母衣武者の親戚の男子2名。紋付羽織袴、白足袋、草履。母衣武者の身のまわりの世話をします。

(10)提灯ていとう持ち

青年男子約20名。白装束で警固に当ります。

(11)後押え

男子1名。紋付羽織袴。

(12)作り物

「ばんばら」は、御旅所を午後8時30分に出発し、2時間30分かかって神社へ奉納されました。近郷近在から集まった約3,000人の見物人で夜遅くまで賑いました。

（中沢 成晃氏 提供）